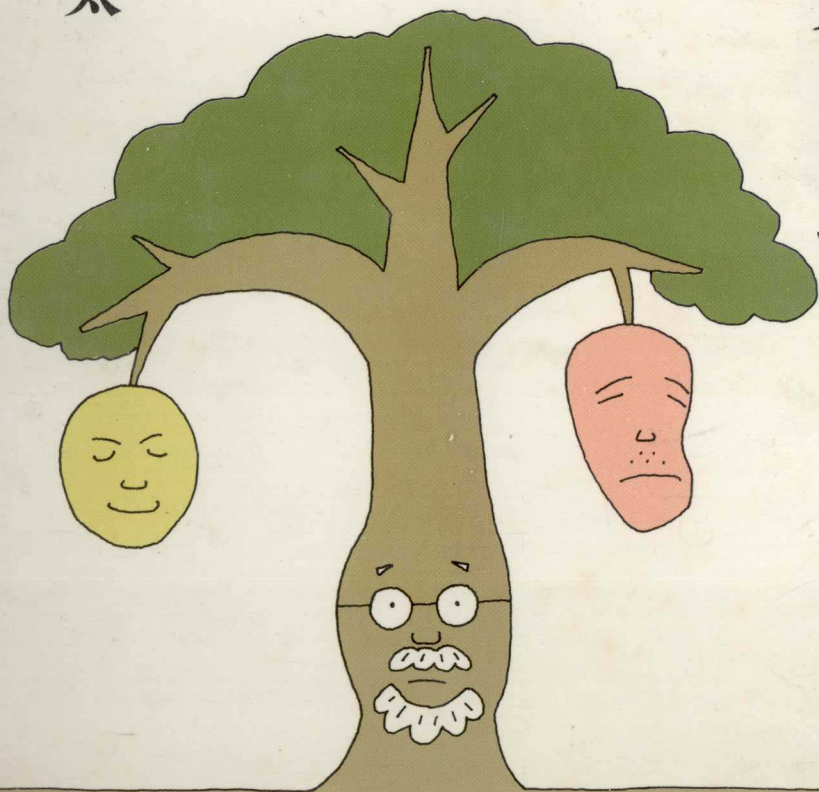


この父にして

斎藤茂太
北杜夫



この父にして

斎藤茂太

北 杜夫



さいとうしげ た
斎藤茂太

〔著者紹介〕

きた もり お
北 杜夫

大正5年3月21日東京生。歌人斎藤茂吉の長男。慶大医学部卒。斎藤神経科病院院長。日本精神病院協会副会長。主な著書『茂吉の体臭』『快妻物語』『茂吉の周辺』『精神公害』『茂太さんの汽車旅行』など。

昭和2年5月1日東京生。歌人斎藤茂吉の次男。東北大卒。作家。主な著書『検家の人びと』『白きたおやかな峰』『酔いどれ船』『どくとるマンボウ航海記』『どくとるマンボウ青春記』など。

この父にして

定価 880 円

昭和51年10月30日 第1刷

昭和51年12月30日 第4刷

著 者 斎 藤 茂 太
北 杜 夫

編集人 桑 原 隆 次 郎

発行人 伊 奈 一 男

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島上

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市中村区堀内町

印刷／図 書 印 刷

製本／大 口 製 本

© S. Saitô
M. Kita

1976年

検印廃止

0095-500358-7904

この父にして
目

次

はるかなる父の国

かみなり親爺 7

祖父母のこと 13

野人紀一 19

この父にして

おやじ欧州留学へ 29

留學生活 39

脳病院焼ける 51

「父を買いかぶってはならぬ」と

すべてを失い裏長屋で 67

茂吉のタバコ 74

ウナギと茂吉 78

茂吉の誕生 84

茂吉の短歌開眼 93

箱根の思い出 96

『柿本人麿』『万葉秀歌』を書く

書は大きく堂々と 112

小学校はガキ大将 119

茂吉の絵 129

最上川の岸辺 141

飛行機事件 144

『白き山』の峰を仰ぎて 149

茂吉をめぐる人々 160

天性の自然人 171

晩年の茂吉 191

チチキトクスグカエレ 199

偉大なる母

短刀を腰に巡回

209

紀一の血を継いで

211

死ぬといい出して二十年

216

小さい時はおふくろの味方

220

天才の妻として

228

装幀

和田 誠

は
る
か
な
る
父
の
国

かみなり親爺

斎藤 おやじはこわかったな。もうかみなりおやじだった。

北 ぼくもそうとう怒られましたよ。

斎藤 それでもぼくの時代からすれば少しやさしくなっていた。第一、学校のめんどうまでみたよ、「勉強してるか」とか、「ちょっとお父さんが教えてやるから」とか。こっちはとんでもない。

北 ぼくは小学校、中学校はあんがい勉強できたんです。それでわりに目かけられてたつともあります。たとえば英語の書き取りなんかで悪い点とったときなんて非常に立腹しまして、書齋に呼びつけて、自分でリーダーの書き取りをぼくにやらせましたね。

斎藤 怒ったといっても、それだけの、少し余裕が出てきたわけだな。

北 それから入学試験にしても、あるいは中学の試験にしても、「全部できたか」って聞くですよ。全部できたというとうソになるから「ちょっと間違った」っていうと、なんで間違ったか、どうしてできないんだと。この質問は横暴だと思いましたね。できないものはしょうがないでしょ。それをなぜできないのかと、居丈高に怒っちゃうわけですね。できてほしいという願

望があったからですね。ただ、自分が中学時代、一番でもないのに、一番だとかウソついていたですからね(笑)。

これは青南小学校に入るときですが、ぼくは気が弱い、どっちかというと弱虫な子でしたから、おやじがそれに景気をつけるために「とにかく質問されたらどんどん手をあげろ、わからなくても手をあげろ」といったのを、はっきり覚えてますね。右側通行か左側通行かというのに手をあげて、答えられなくて恥かいた。ちょっと横暴ですね。だからそういうところはそうとう強引だったわけですね。おやじは強引さとわがままと、気が弱いのと、いろいろ入りまじってますねエ。青藤 青南小学校はすぐそばで、鐘が聞こえるぐらいの場所だった。あれは青山小学校のほうが古いんだな。

北 兄貴のころは青南小学校はやっぱり名門校でしたか。

青藤 かなり越境組がいた。

北 ぼくのと時もそう聞いたけど、いちおう受ければみんな受かったという感じでしたね。

青藤 いまになってみたら青南からずいぶん精神科医がたくさん出ているんだよ。亡くなった島崎敏樹さんがそうだ。それから東大精神科の台教授。あれは島崎さんと二、三年違うくらい。わりに青南出が多い。

北 安岡章太郎さんも途中弘前から青南に入ってきた。

青藤 安岡さんが住んでいたのは青南堂のすぐ裏のほうだといっていたよ。わりに青南のこと詳しく書いていた。

北 ええ、書きましたね。

斎藤 ぼくは劣等生だった。登校拒否組だから(笑)。おふくろもおやじも学校とまったく関係ない。いまの教育ママなら毎日のように学校へきたり、毎日のように先生に会ったりするはずなのに、まずきたことない。普通のおふくろなら運動会ぐらいきて、子供が走る姿ぐらい見るだろうと思うけど、おそらくきたことないね。ぼくは運動会の練習なんかのときに校庭で正面衝突して脳震盪を起こしたことがあるんです。そのときぐらいかな。ぼくが意識不明になっているので、おふくろがかけてきた。それぐらいなもので、おやじはおそらくきていないですね。

ところが弟ぐらいになると少し余裕が出てきたと見えて、こんどおやじがかなり学校に関してのめんどろをみてるね。

北 ぼくは幼稚園を兄貴と同じでいやで結局行かなかったんです。そのときはおふくろはまだいたけど、なんにもいわなかった、おやじはもとより。そのときの記憶はないんですけど、とくに幼稚園に入れようという意思はないというより、二人とも忙しくてほったらかしておいたんだろうと思うんです。それから青南小学校を受けるときは女中さんがついてきたのを覚えてるね。兄貴もぼくもずいぶん登校拒否しましたね。

斎藤 多かったどころじゃなくて、これはひどいんだな。弟は幼稚園とうとう拒否したけれども、ぼくはおふくろに無理やりに入れられた。うちから五、六分のところですが、幼稚園の門の前で泣き叫んで足をバタバタ。そうしたら生憎隣に交番があつておまわりさんがきて、抱きかかえられて園長室に連れ込まれたことがあるんだ。

おもしろいことにぼくの行っていた幼稚園の娘さんがぼくと同年で小学校も一緒なんです。その彼女がいま三井不動産の江戸英雄夫人。江戸さんがその田中幼稚園の先生の家に学生時代に下宿していたんで、いま江戸さんと会うと必ずその幼稚園の話がでる。バツタバツタとひっくり返って暴れた。そうすると園長先生がぼくに砂糖水を。そのころ砂糖水といったら最高のご馳走ですから、ぼくは砂糖水に騙されてとにかく幼稚園にかよったね。

幼稚園を卒業していよいよ青南小学校の入学式の日。またぼくはその日に逃亡して、この人の小説に出てくる青山墓地、あそこへ逃亡して逃げ歩いてた。青山墓地はお互いに好きなんで、あそこは一つの逃避の場所だった。逃避の場所というのは非常にこわいんですけどね。一べん入ったら出られないぐらい、サハラ砂漠のような感じとか、シベリアのタイガみたいな。ずいぶん奥深いという感じしたろう、青山墓地というのは。

北 ぼくも幼年時代から青山墓地と原っぱというのが非常に印象深くって、おやじの歌にも青山墓地の歌はずいぶんあるでしょう。

斎藤 青山墓地でぼくが逃げているところをつかまった。追跡隊がきて。それで抱きかかえられて小学校へ連れ戻された、その入学式の日に。

北 ただおやじは忙しくてあんまり干渉をしなかったんじゃない？

斎藤 干渉しなかったな。その辺のことは。

北 ぼくは小学校時代、部屋がなくて、七畳半の部屋に姉たち四人で寝ていたけど、その押入れを住居にしていたでしょう。ようやく小学校五年ぐらいになってから玄關脇に唐紙で仕切られた

二畳の部屋をもらったんです。その頃からおやじがちょっと勉強にちょっかいを出しました。

斎藤 弟がちょっと姿が見えないといつてさがすと、たいがいその押入れのなかに入っている。ぼくは、おやじというのは籠る人だと思ったけれども、その籠るというのがちょっと弟に伝わっているような感じがする。まっ暗い押入れのなかに入ってじっとしているということ、これはちょっとぼくにはなかったことね。

北 懐中電燈ぐらい照らしていました(笑)。

斎藤 子供というのは暗黒は非常に恐怖を感じるものだと思うけども、ぼくはふとんのなかにもぐってふとんをかぶって暗くしているのはわりに好きだった。しかし弟ほどは強くなかったと思う。おやじの籠るという感じは弟の方に出ているね。

北 ぼくは、おやじが疎遠な存在だったでしょう。昔は、たとえば中学に入って成績悪い点とったときに、怒って英語の書き取りなんかしてくれたけど、そういう以外は全部、子供なんかほったらかしでした。だからぼくは、おやじは特別な人間で、おやじって気がしませんでした。兄貴は十一歳上でしょう。だから兄貴のほうがむしろおやじって感じがしましたね。兄貴は追浜だの立川の飛行場にぼくを連れてってくれたりしたから、むしろ近い関係の人間だという感じはもってました。おやじはあまりに希薄で、ときたま激怒してこわい存在で、あれほどこわい男というのをぼくも知らないですね。ぼくがいま年をとってだんだん怒りっぽくなってるんです。女房が、あなたはすぐふくれるとかいうから、そのときに、おやじに比べれば何十分の一だと解説してやるんだけど、女房はいかんせんおやじを知らないんですから。

斎藤 ぼくのほうが、ずうっとこわかったよ、おやじがまだ若いもの。弟のときは少し好々爺になりかけている。それに生活も安定してきたでしょう。

北 ぼくの名前は、茂吉の「吉」かもしれないけど、平福百穂先生がだいたい宗吉そうきちというのを選んでくださったって、おやじもそれに賛成した。ただ、宗吉っていうとなんだかコミックな感じがするでしょう。ぼくはずううっというやでたまになかったんですけどね。

斎藤 ムネヨシよりいい。ぼくの場合は、はじめおやじは頭のなかに描いていたのは「茂一」だったと思うんだよ。ところが少し前に呉茂一、つまりおやじの精神科の恩師の呉秀三先生のご令息に——あれは正式に言えばシゲイチですか——茂一ができちゃったわけなんで、とにかく恩師より墓を小さくしろというほうだから、おそれおおくて茂一をやめちゃったらしくて、そして茂太になったと思うんだ。

それで、ぼくは茂一っていい名前だと思って、一代おいて、ぼくの長男に茂一とつけた。これは、おやじから「孫が生まれたらこんな名前がいいだろう」って、やつぱりくるんだな、干渉が。手紙にいろんな候補があつてね。しかし「茂一」はぼくががんばっちゃった。ところが次男が章二というんですけど、これはおやじがつけた名前です。

北 おやじは、がいて女の子よりも男の子を尊重する気質がありましたね。孫でも。ちょっと封建性だと思うんですけど。それは明らかに男の子のほうをかわいがったですね。女の子はそれに反して冷たいといっちゃ言いすぎだけど。そういうところはかなりあったんじゃないですか。だって、ぼくのきょうだいだって、百子だって、昌子だってそんなに重要視されなかったです

よ。兄貴よりぼくは若いころ勉強できたから、ぼくを属望してるところもあったと思うけれども
(笑)。

祖父母のこと

北 ぼくは昭和二年生まれで、三年に祖父が死んでおりますから祖父はぜんぜん思い出はないですね。『榆家の人びと』では大正の末に死ぬことになってますけれど、本当は昭和三年です。

兄貴は何歳ぐらいから記憶がありますか、おやじや祖父のこと。

斎藤 ぼくは人生の記憶は四つから。だから長崎からだいたいはいはじまっているんだな。その前に非常に強烈な恐怖とか、そういった印象はある。いまの子供たちはテレビで西洋人なんかやたら見ているけど、われわれのころは西洋人の顔は活動大写真でしか見なかったわけです。その活動大写真で西洋人の顔を見てものすごく恐怖にかられて泣き叫んだ覚えがある。それはきつともっと前、三つぐらいじゃないかな。わりに時間的に長い記憶は長崎からはじまっている。だからおやじの記憶も長崎からはじまっている。

第一、長崎に行くまでにおふくろとかおやじを間近につらつらとながめた覚えがないわけ。実に奇妙奇天烈な脳病院のなかで生まれて、そのなかの一角にしもた屋みたいなものがあって、そ

こにぼくが生活して、おやじとおふくろはそこにいないわけです。「松田の婆や」というのがあったの小説に出てくるけれども、あの婆やに預けられてずうっと育った。つまりぼくのおふくろというのは婆やなんです。実際におやじも病院にあまりいなかったんだと思うんですね、そのころは。じいさんの方がずっと身近だった。

北 その病院というのは昔の大病院ですか。

斎藤 そう、そう。

北 それははっきり覚えていますか。

斎藤 それはもうはっきり覚えている。大病院で廊下をかけずり回った思い出から全部覚えている。

北 ぼくなんかは子供のとき、病棟のなかへ入っていった患者さんとピンポンやったりしたけど、兄貴のころはどうでした。

斎藤 やっぱり病室のなかへ入り込んだ。二月の「豆まき」なんていうと、一緒になって病室のなかで「鬼はア外」とやった。患者さんが廊下におこった豆集めている姿まで覚えている。

病院が燃えちゃったのが小学校四年だからかなり覚えている。関東大震災もはっきり覚えている。北 関東大震災のときに兄貴がこわがって、あとでも家のなかで寝ないで、自動車のなかで寝たというのはほんとうですか。

斎藤 うん、こわくて。関東大震災の前の日におふくろに連れられて箱根の山小屋から帰ってきた。学校が始まるから。震災の日に祖父の紀一が箱根からおりてきて小田原の駅で震災にあっ